

様式 (7)

報告番号	甲 保 第 63 号 乙 保
論 文 内 容 要 旨	
氏 名	張 林 婉
題 目	Assessment of dyspnea, ADL, and QOL in the perioperative period in lung cancer patients treated with minimally invasive surgery (低侵襲手術を受けた肺癌患者の周術期における呼吸困難、ADL、QOL の評価)
<p>目的 肺癌患者は一般的にビデオ支援下胸腔鏡手術 (video-assisted thoracoscopic surgery; VATS) などの低侵襲手術を受ける。われわれは、European Organization for Research and Treatment of Cancer-Quality of Life Questionnaire (EORTC QLQ) C-30、QLQ-LC13、がん性呼吸困難尺度 (Cancer Dyspnea Scale; CDS)、肺ADL (Pulmonary-Activities of Daily Living; P-ADL) の質問票を用いて、肺癌患者の術後の健康状態および症状の変化 (特に、呼吸困難感とADL) について検討した。</p> <p>方法 これは縦断的記述研究である。2012年から2021年の間に徳島大学病院で肺切除術を受けた肺癌患者113人を対象とした。男性61人(59%)、平均年齢69歳(46-88歳)。喫煙者は57人で、平均Brinkman indexは900であった。83例(81%)が腺癌、15例(15%)が扁平上皮癌であった。葉切除術は79例(77%)に、区域切除術または楔状切除術は24例(23%)に施行された。91例(88%)がVATS法で、9例(9%)がロボット支援下手術(Robot-assisted thoracic surgery; RATS)法で手術を受けた。</p> <p>術前、術後1、3、6ヵ月後にEORTC QLQ-C30、QLQ-LC13、CDS、P-ADLを記入した。</p> <p>①EORTC QLQ-C30は、30の質問/項目からなる自己評価質問票で、5つの機能的尺度(身体的、役割、認知的、感情的、社会的)、3つの症状尺度(疲労)を含む。②LC13は肺癌に関連する症状(咳、咯血、呼吸困難、部位特異的疼痛)、化学療法/放射線療法に関連する副作用、および鎮痛剤投薬を評価する13の質問/項目が含まれている。③CDSは呼吸努力感に関する5項目の質問、呼吸不快感に関する3項目、呼吸不安感に関する4項目の合計12項目の質問からなる。④P-ADLでは、食事・排泄・入浴・洗髪・整容・更衣・屋内歩行・階段・屋外歩行のADLの9カテゴリーを、達成方法・距離・頻度・速度・息切れ・酸素量の6つの指標を用いて評価する。</p> <p>結果 機能的尺度得点に関しては、身体機能および役割機能の障害が術後6ヵ月間持続した。症状尺度得点では、疲労、疼痛、呼吸困難、食欲不振が術後6ヵ月間持続した。肺癌に特異的な13の症状のうち、呼吸困難、咳嗽、胸痛は、術前と比較して術後6ヵ月間持続した。CDSでは、努力感、不快感、呼吸困難総尺度の得点が術後6ヵ月間上昇した。P-ADLでは、ほとんどのADL(食事、排泄、入浴、化粧、着衣、屋内歩行、階段)が術後1ヵ月で障害されたが、3ヵ月までには回復した。ADLの頻度および速度指数は、術前と比較して術後1ヵ月で有意に低下した。ADLの呼吸困難指数は術後6ヵ月間低かった。</p> <p>考察 身体および役割機能の障害が術後6ヵ月間持続した。疲労、疼痛、食欲不振、肺に特異的な呼吸困難、咳嗽、胸痛が術後6ヵ月間持続した。呼吸困難の原因として、努力感、不快感によると思われる。ADL遂行時の呼吸困難のみが6ヵ月まで持続した。肺癌患者は術後3ヵ月、特に1ヵ月以内に医師や看護師からQOL-呼吸困難、疼痛、疲労、ADLに関する助言を受ける必要がある。3ヵ月後にはほとんどのADLを制限なく行うことができる。医療スタッフは、手術が低侵襲であるにもかかわらず、術後6ヵ月後の呼吸困難の影響を考慮する必要がある。</p> <p>結論 低侵襲であるにもかかわらず、健康状態および症状の障害は術後6ヵ月間持続した。</p>	